音節構造・形態素・文字

——中国文字改革の行方——

秦　　耕　司

0・0　1928年トルコ共和国では，それまで使用していたアラビア文字を廃止して，ローマ字を採用する決定がなされた。アラビア文字では，トルコ語の母音表記が十分に行えない[1]，というのがその主たる理由である。宗教的立場からの強い反対は当然あった。元来トルコ語においてアラビア文字を使用するようになったのは，イスラム教への改宗にある。その経典コーランは，他の言語への翻訳を許されていなかった。そこには，アラビア文字の不合理を押してまでも，約千年に亙って用いられてきた絶対的権威があった。しかし二十世紀になって，イスラム教が相対的地位に落ち，権威が衰退したのも手伝って，ついに「便利さ」に抗することができなくなったのである。事実トルコの識字率は，文字改革実施後，僅か三年足らずの間に，アラビア文字使用時の三倍近くにまで増加している[2]。

このことは我々に次のことを教えてくれる。

1．文字が一種の約束事である以上，音声との間で一定のルールさえ確立していれば，どのような文字体系を用いても，音声を表記することができる。

2．しかし，そのルールは，簡単で合理的であるほどよい。

この二点は，トルコ語の場合に限らず，世界における文字の変遷が物語っている，音声と文字との関係である。

0・1　先ず最も身近な日本語を例にとろう。我々が日常使用している漢字は，もともと中国語を表記するために生れた表意文字である。それが言語系統の全然異なる日本語に借用され，千年以上経った今日も，何ら

漢字を支える権威がないのにも拘らず，なお正式に用いられている。この表意文字は，近隣の朝鮮語やベトナム語にも借用され，漢字を中心とした一大文化圏を形成した。韓国では，十五世紀になって，表音文字ハングルを造り，漢字との併用時代を経て，現在はハングル専用への道を歩んでおり，ベトナムは，十九世紀の文字改革運動の結果，ローマ字を使用するようになったが，日本では，漢字からかなを発明し，現在は漢字にそのかな文字を交えて，より効果的な表記法が行われている。

0・2　次に表音文字を見よう。ラテン・ローマ字は，子音優勢の言語によって育てられた単音文字である。一つ一つの文字は意味を有せず，音声を子音と母音に分解した単音を表すに過ぎない。言語における意味は，この単音の組み合せによって生じるから，同一の文字であっても，全く異なった系統の言語の表記が可能である。当然日本語や中国語をも表記できる。日本には日本式、標準式、訓令式等のローマ字表記法があり，中国では,1958年に漢語拼音方案が公布され,小学校の国語の教科書や現代語の辞典には，全てこのローマ字で発音が表記されている。そしてこのラテン・ローマ字も，もとを糾せば表意文字から発展して来たものであることは，周知の通りである。

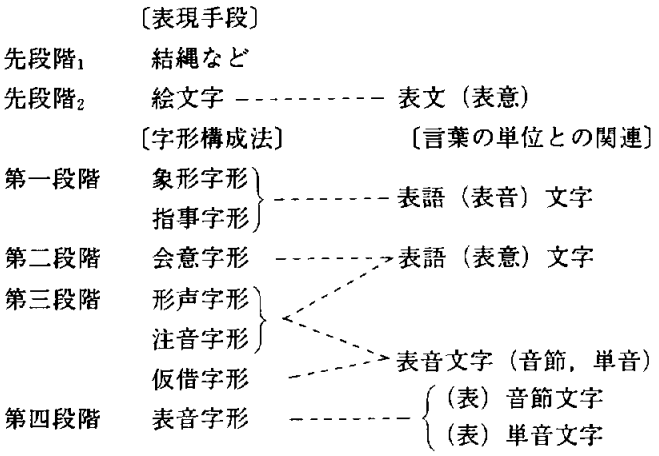
これらの歴史的事実より，表意文字、表音文字を問わず，同一の文字が音声はもちろん，系統の異なる言語をも表記できることが，了解できるであろう。

0・3　言語とは一義的には音声言語である。意味はその音声に宿っている。このことは中国語とて例外ではない。従って，文字は本来音声を写し出すだけで十分である。しかるに表意文字は，音声とは別に字形が意味を表示している。漢字が，音声の異なった日本語や朝鮮語を表記できる所以であり，異言語において独自の漢字（擬似漢字）を造れる所以である。煩雑さを厭わなければ，漢字は欧米の諸言語をも表記し得る能力を持つものと見なさなければならない。

しかし，可能であることと，実用として便利であることとは別問題であ

る。文字を使用するに当って，合理性とは何に起因するのであろうか。音声言語との関連における，文字の適不適を不問に付しておく限り，中国語と漢字の関係を正く捉えることはできない。最も普遍性を有すると思われている単音文字が，中国語にとって，否，日本語にとってすら，却って不合理である，と言えなくもないからである。

1・0　文字はB.C.3,000年頃からB.C.1,300年頃にかけて，シュメール人、エジプト人、漢民族等によって発明された。その民族が独自に造ったものから，先行文字体系の影響を受けてできたものなど様々であるが，現在世界各国で使用されている文字は，いずれもこれら幾つかの古代文字から派生発展したものや，その刺激によって造られたものである。そして文字の歴史は，表意文字から表音文字への移行，複雑な字形からより簡単な字形への変遷の歴史である。今，西田龍雄氏による文字発達の段階図[3]を挙げる。



1・1　それでは，発明当初は例外なく表意的であった文字が，これまた例外なく表音化に向かったのは，何に起因するであろうか。

上述のように，言語とは一義的には音声言語であり，意味はその音声に宿っている。とすれば，言語と文字の適合性を考察するには，音声の単位である単音や音節，および意味の単位である形態素や単語との関連におい

て考察を進めるのが，最も科学的であろう。漢字廃止論者は，画数が多く煩雑で覚え難い点を攻撃するが，それでは擁護論者のいう漢字の伝統性，つまり長期に亙って用いて来たから手放したくないという，愛着型感情論の裏返しである嫌悪型感情論に過ぎない。

漢字の画数は，繁体字の平均16.1画から，簡体字は平均8.2画と，約半分に減り[4]，実用性は高くなっているし，まだ工夫の余地は残されている。また漢字の表意性に固執するとすれば，その行き着く所は，最も表意性に富んだ字形，即ち，最も非実用的な漢字である甲骨文字に成らざるを得ないであろう。いずれも漢字の歴史と，改革可能な記号としての性格を考慮に入れていない，一面的な論である。

それでは先ず，表音化移行の原因から見ることにしよう。

1・2　およそ事物は，小さな単位を組み合せて，より大きな単位を構成するが，その単位の数は，市町村、県、国の行政区画のように，上位になるほど少なくなるものと，逆に言語の単位のように，下位になるほど少なくなるものとがある。

言語における最小の単位は単音である。単音数は，どの言語でも非常に限られており，母音と子音の数を見れば判るように，いずれも数十を出ない。文字発達の最終段階で，母音や子音を表す単音文字が生れ，一度生れるや，広範囲に普及したのは，単音文字が如何に簡便で普遍性を持っているかの証左であろう。

この単音が組み合さったのが音節である。音節数は，日本語、朝鮮語、中国語では，他の言語に比べて少なく，子音と母音の結び付きが整然としており，日本語の五十音図のような音節表ができている。朝鮮語では反切表といい，その数は140[5]。中国語では語音表といい，北京語の音節数は411ある。日本語のかなと，朝鮮語のハングルは，いずれもある音節に対応する音節文字である。中国語では，一つの音節が幾つかの漢字で書き表されるので，一音節一字の対応関係にはないが，漢字一字が一音節であるという意味において音節文字である。

これらの言語において，その文字が音節文字に止まり得ているのは，音節数が少ないことも一因となっている。

1・3　これが意味を伴った単位である単語となると，その数は飛躍的に増大する。数万におよぶ単語の数だけ文字を造るのは煩雑に過ぎるし，字典の排列や検索、印刷、タイプライターなど実際面において，面倒で困難な問題が多い。事実，表意文字と称される漢字において，音声を表す部分を加えた形声文字や，音声のみを借用した仮借文字が，すでに紀元前における，中国最初の文字改革によって造られた，秦代の篆書にあることを指摘したのは，後漢の文字学者許慎（？－100）であった。許慎はその著『説文解字』に9,353字を収め，うち八割以上の7,697字を形声字としている[6]。十九世紀の末，甲骨文字が発見されると，漢字の原初形態である甲骨文字にも，形声文字の存在が認められた。意符と音符の組み合せより成る形声文字は，時代とともに増加の一途をたどっており，現代において，文字改革運動が展開していく中でも，新式の形声文字，即ち漢字の意符と注音字母を組み合せたもの，ローマ字を利用したものなど，所謂新形声字（拼音形声字）が生れるに至り，その是非を巡って議論が闘わされている。この外，エジプトの聖刻文字、メソポタミアの楔形文字、中国雲南のモソ象形文字など，漢字以外の表意文字にも形声文字の類はあった。

文字とは，音声の裏付けを伴う言語記号の謂である。言語の持つ意味は音声によって表出されている。文字の前段階である絵文字は，音声と結び付くことによって文字へと発展し，意味を表記する機能を，飛躍的に増大させた。ここに記号（文字）による表記上の自由度が，無限の可能性に向かって開かれたのである。文字が，音声言語を写す手段であり，用具である以上，文字は文字としての資格を得た時点で，同時に表音化へ移行する性格を，その本性として獲得したのである。

1・4　表意文字が，全面的に表音文字に移行代替されるようになったのは，洋の東西を問わず，先行文字体系の借用に始まる。

単語には，「ヤマ，河 hé，book」など内容を表すものと，「テニヲ

ハ，着 zhe，of」など専ら文法的機能を表すものとがある。また英語の人称代名詞のように，単語全体が形態変化を起すものもあれば，日本語の動詞や形容詞のように，単語の語尾が活用変化するものもある。そして，文法機能語や形態変化は，言語によって一様でないから，この部分を表記する文字は，その元の言語において表意作用があっても，借用する側の言語にとっては，その文字によって表される意味は不要の代物となり，勢い音声のみを当て嵌めることになる。日本語における，漢字を借用した当初の宣命書きや，歌謡等に見る万葉仮名が，その好例であろう。

既にその字形の表す意味が不要となれば，字形はどうでもよい。ここに字形の簡体化が起る。日本語のひらがな、カタカナは，いずれもこうして漢字から生れた，単純字形の表音文字である。アルファベットも借用を重ねることにより，次第に現在の字形に到達した単体表音文字である。

1・5 しかし字形の簡略化は，表意から表音への移行のみが原因となっているのではない。

表意文字とは，元来その表す事物の形や概念を図像化したものであり，抽象概念を表す文字はもちろん，山や木のように，具体的な物を象った象形文字であっても，その字形は一種の約束事に過ぎない。それは象形文字と言えども，それが文字である限り，その背後には必ず音声があり，その表す意味は，字形の如何に拘らず，音声によって支えられているからである。従って物に象る，象らないとは関係なく，ある字形がある概念に対応していればよく，線一本で「キ(木)」を表し，線二本で「ヤマ(山)」を表してもよい。異なった言語において，原初期の象形文字が類似した形を持ちながら，それぞれ次第にかけ離れた字形へと発展した原因もここにある。そして，「山」や「魚」などの例に見るように，象形文字からその表す対象物を連想するのは，どの言語においても，かなり早い時期においてさえ，すでに困難な段階に達していた。

このように，文字が約束事である以上，ある字形は他の字形との区別が付きさえすればよく，その区別が簡単明瞭であるものほど，識別機能は優れていると言える。文字は文字としての形が成立した時点で，同時にその

字形が，より簡単な方向へ改変が加えられる可能性を，内在的条件として具えていたのであった。

字形の大幅な簡略化は従って，借用からだけではなく，同一言語内でも生じており，それは書き易い筆記用具の発明と大きく関係している。中国では，紙と筆の発明により，複雑な篆書から，許慎も関連付けのできなかったほど簡略化された隷書が生れた。エジプトでは，パピルスとペンの発明により，絵画性の強い元の聖刻文字(ヒエログリフ)とは，およそかけ離れた神官文字(ヒエラティコス)や民衆文字(デモティコス)が造られている。

文字の変遷は，合理性、簡便性へ向けての変革であった。

2・0　漢字は，紀元前約1,300年に甲骨文字として生れてから，今日に至るまで，幾度かの変革を経ている。しかしそれは，甲骨文字 ― 篆書 ― 隷書 ― 楷書という画数を少なくする改革のみで，漢字という枠内での変革に過ぎなかった。そこに漢字を廃止してローマ字を採用せんとする，文字体系全体に亙る改革運動，即ち周有光氏のいう「制度の改革」[7]が叫ばれるようになったのは，近代に至って，中国文化にとっての異質の文化 ― 西洋文明との出会いによる。

しかし，一口に異文化との接触といっても，単にローマ字との出会いが発端となっているのではない。早くも十七世紀初めの明時代に，西洋文明の一端をもたらした宣教師には，イタリア人 Matteo Ricci (利瑪竇) やフランス人 Nicolas Triganuls (金尼閣) のように，漢字音をローマ字で表記し，書物を出版した者もいる。しかし一部音韻学者の注意を引いただけで，何ら他に影響を与えるには至っていない。普通文字改革の声が，広範な社会運動にまで発展するには，その背景に，国家民族の存亡をかけた危機感と，そこから勃興する愛国救国の運動がある。

トルコの文字改革は，オスマン帝国の衰退から，ヨーロッパ諸国との経済的、軍事的地位の逆転，第一次世界大戦の敗北を経験して，ムスタファ・ケマルの強力な指導力による民主革命と並行して実現を見た。ベトナムには，十七世紀に宣教師によって考案されたローマ字クオック・グーがあっ

たが，それが急速に普及したのは，フランスによる植民地化の進んだ十九世紀後半である。韓国では，文明開化から，日本統治下におけるハングル運動を経て，解放後に本格的な使用の運びとなった。日本における最初の漢字廃止論は，鎖国から開国へと社会が大きく揺れ出した幕末に，前島来輔によって将軍徳川慶喜に建白され，維新後は，漢字廃止論、ローマ字論、かな文字論、新字論の四つの流れを生じた。また第二次世界大戦敗戦直後には，日本語そのものを廃止せんとする論が，著名な名文作家によって主張されている[8]。

中国にはアヘン戦争に始まる屈辱的な近代史が横たわっている。軍事力と近代科学による西洋文明の中国進入は，中国社会を半封建、半植民地という塗炭の苦しみに陥れた。また思想的には進化論が大きな影響を与え，当初においては，中華民族は劣等民族であり，やがては世界から取り残され滅びるのではないか，という危機感が知識層にあった。西洋文明の衝撃は，社会的、政治的な混乱だけでなく，中国のたどるであろう運命に「学問的」根拠を突き付けながら，思想面、精神面にまで大きな動揺をもたらしたのである。その時代背景には，日本とは比較にならぬほど，深刻で厳しいものがあった。この時代は，文学革命、婦人解放運動、政治運動など様々な社会運動が相互に関連を以て，近代史の大きなうねりとなって展開されており，文字改革の論調も，日本や解放後の中国に比べて，かなり激しい口調が感じられる。

2・1　中国に文字改革運動が起る契機となった異文化が，西洋文明であることは言を待たない。しかし，それだけではない。日本滞在の経験を持つ中国の知識人は，日本のかな文字の簡便さと，そこから来る普通教育の普及状況に，一様に注目している。

1877年日本公使の一等書記官として着任した詩人外交官黄遵憲（1848～1905）は，七言絶句の形式を用いて日本を紹介した著書『日本雑事詩』巻一で，かな文字に通じていれば，婦女、子供でも小説を読み，手紙文くらいは書ける[9]と述べている。

日本に亡命した，国語運動の先駆者王照（1859～1933）が，かなにヒントを得て官話合成字母を考案したことは，余りに有名である。亡命中の王照をして，逮捕の危険を犯してまでも帰国を促したのは，この官話合成字母の出版にかける，意欲と情熱であった。王照は僧侶姿に身をやつし，秘かに帰国を果たすと，官話合成字母を広めるために，各地を暗脚した。そして1900年天津で，蘆中窮士（王照の号）の署名で出版をすると，その翌年李鴻章を訪れて，秘書の于式枚と次のような会話を交している。

于式枚：「貴殿は海外より帰国されたばかりだが，何か中国を救う方策をお持ちであろう。」

王照：「天下に，一朝にして成る方策など，ありましょうや。全国に二十万の秀才、挙人、進士がおりまするが，普通教育を受けし五千万の日本人民に比すれば，二百五十分の一であります。一を以って二百五十に敵するに，如何なる方策がありましょうや。中国政府は，下層教育を重視せねばなりませぬ。下層教育の障害を取り除かんとせば，言語に通じた文字を造り，言文一致とせねばなりませぬ。」

于式枚不満げに：「これは貴殿のお言葉とも思えませぬ。貴殿は定めし雄大なる策をお持ちであるに相違なけれど，小生など下っ端にはお話し下さらぬと見えまする。」

王照怒りて退出後思うに：『このわからずやめが。』[10]

王照の信念と意気込みを，余すところなく伝えるエピソードである。

清末に考案発表された表音字母は28種，その中で官話音によるものが11種[11]に上るが，最も流行したのは，王照の官話合成字母であった。

音韻学者章炳麟（1869～1936）は，日本亡命中に在日留学生から乞われて，音韻学や説文を講じていたが，帰国後の1908年エスペラント採用論に異を唱え，篆書の一部をとった注音字母を考案発表した。この字母は後に修正を加えられ，中国最初の国定表音字母として，1918年に教育部より公布される処となり，小学校教育にも取り入れられたが，1930年になると字母という名称から起っている誤解を解くために，名称は注音字母から注

音符号に改められた。つまり王照の不満をよそに，注音符号は漢字に代る文字ではないことが確認されたのである。しかしそれと同時に，注音符号の一層の普及を謀る政策として，全国の各省、市、県の教育庁、局内に，注音符号推進委員会が設置されたのもまた事実である。注音符号は，現在台湾の小学校における識字教育に使用されており，大陸でも高齢者のために,辞典の各音節の見出しには,拼音字母とともに併記されている。注音符号の登場は，中国三千年の文字変遷史より見て，文字の「制度の改革」の端緒と見なされており，漢語拼音方案などとともに，文字改革運動史上の主要な里程標として位置付けされている。

ここで後日談を一つ付け加えれば，毛沢東は，注音字母ではまだ画数が多いとし，中国の表音文字は，日本のかな文字より優れたものでなくてはならぬ[12]，と不満を示したという。

北京大学教授の銭玄同（1887～1939）は，言語学者として文字改革論にも多くの業績を残しているが，在日留学時代に教えを受けた章炳麟よりも急進的で，強烈な漢字廃止論者である。否，漢字廃止論者と言うより，中国語そのものを廃止せんと，強く主張して止まない。銭玄同は，従来の中国語では古代の幼稚な思想を表し得るだけで,Lamark，Darwin 以後の新しい世界文明を表すのは不可能である。中国を滅亡させまいと欲し，中国民族を二十世紀の文明的民族たらしめんと願うならば，孔学を廃し，道教を滅ぼすのが根本的解決法であり，そのためには，孔門の学説と道教の妖言を記載した漢字文を廃止するのが，根本の根本であるとして，進化論の観点より中国語を廃止し，エスペラントの採用を提唱した[13]。

銭玄同はまた，日本が完全にローマ字化が実現できないでいるのは，中国語から借用した大量の漢字語彙を，すっかり駆逐していないからである，とも述べている。

その外，学制視察に日本を訪れた，京師大学堂教習の呉汝綸（1840～1903）は，古文の名文家として知られる桐城派の文士であるが，かな文字による初等教育の実状と効果を見聞する一方，王照の官話合成字母に強い興

味を覚えた。呉汝綸は日本滞在中交流のあった日本人に対し，教育普及のため，官話合成字母を小学校教育に用いる決意を伝えるとともに，漢字は高学年から学ばせるのがよい，との見解を示している。そして帰国後，管学大臣張百熙にその旨上書し（1902年），伊沢修二なる人物の勧めを受けて，中国語言語音統一の必要性を進言した。ここに清末における，中国文字表音化運動の理論的支柱「教育の普及」と「言文一致」に，新たに「言語の統一」が加えられることになった。発音の統一，即ち共通語の普及は，表音文字を使用するに当たっての前提条件ともなるべきものであり，方言差の大きい中国語にあっては重要課題で，次の年表でも見るように，解放後も周恩来によって，文字改革の任務の一つとして掲げられている。

2・2　さて清末から日本への留学が始まるが，その目的は，西洋の学問を学ぶためであった。留学地に日本が選ばれたのは，地理的に近く，経済的負担が軽くて済むことの外に，日本では漢字を使用しているために，中国人にとっては，学ぶのに有利な条件が備わっていたからである。

当時の留学生は，もちろん知識人である。幼少のころより，古典の暗誦を通じて，煩雑な漢字（当時は“學、豐、體、亂”のような繁体字であった）を沢山覚えた経験を持つ中国の知識人たちが，千年以上にも亙って母国の文化の裨益を被っていた隣の小国日本で，漢字を基にした表音文字を造り，婦女、子供に至るまでが文字を操っているのを，眼の当たりにして喫驚するのは，けだし当然であったかも知れない。今や日本は，中国に先駆けて西洋文明を取り入れ，近代化の道を歩みつつあったのである。洋務派の末期に出た張之洞は，儒学思想を根本におきながらも，西洋の学問に通じることの重要性を説いた『勧学篇』の序（1893年）で，「日本に及ばぬことを恥ずべし」と述べている。

中国で漢字廃止の声が起り，文字表音化の運動が展開して行く，歴史的、社会的条件は，十分に備わっていたのである。

2・3　1949年中国では，トルコ同様革命が成功した。これは，易しく判り易い大衆の言葉を用いて，大衆を率いてきた，毛沢東式戦術の勝利で

もあった。その毛沢東は，1951年に「文字改革は，世界の趨勢である表音文字としなければならない。」[14] と唱えた。新中国では，政府の強力な指導とマスコミの宣伝の下，広汎な大衆運動が繰り広げられ，解放前よりも一段と組織的に，研究、運動が展開して行くことになった。次に主な出来事を年表[15]より拾ってみる。

1949年　中華人民共和国成立。

1951年　毛沢東：文字は改革して，世界の文字に共通の表音化の方向に向わなければならない。漢字の表音化には多くの準備がいる。表音化の前に漢字を簡略化して現在の役にたて，同時にいろいろな準備を積極的に進めるべきである。

1952年　政務院：中国文字改革研究委員会設置

教育部：常用字表（一級常用字 1,011字，二級常用字 489 字，補充常用字 500 字，計 2,000 字 ）公布

1954年　国務院：中国文字改革委員会設置

1955年　第一回全国文字改革会議

中国文字改革委員会：「第一次異体字整理表」公布 810 組 1,865 字を 1,054 字に整理

1956年　中国文字改革委員会：「漢語拼音方案草案」発表

国務院：「漢字簡化方案」公布　簡体字 355 字

文字改革の専門誌『拼音』創刊

中国文字改革委員会：「通用漢字表草案初稿」5,448 字 + 500 字

1957年　国務院：「漢語拼音方案（草案）」公布

雑誌『拼音』を『文字改革』と改称

1958年　地名、人名専用字の整理

周恩来：《当前文字改革的任務》　文字改革の任務三ヶ条：1.漢字の簡体化 2.共通語の普及　3.漢語拼音方案の制定と普及。(政治協商全国委員会報告会)

国務院：「漢語拼音方案」公布

劉少奇：漢字改革を積極的に推し進める。（八大第二次会議）

1964年　文字改革委員会：「簡化字総表（第二版）」 2,236 字を規範字体とする。

文字改革委員会、文化部：「印刷通用漢字字形表」6,196 字の標準字形を規定。

1977年　国務院：「第二次漢字簡化方案(草案)」公布（半年後に使用されなくなる。）

1978年　教育部、中宣部：「第二次漢字簡化方案（草案）」の使用中止を通達。

1980年　高等院校文字改革研究会：文字改革の専門誌『語文現代化』創刊　「文字改革の最終目的は，言語文字の近代化であり，言語文字の近代化への主な作業は，文字改革である。」（発刊の辞）

文字改革委員会改組 ；「第二次漢字簡化方案（草案）」修訂委員会設置

同委員会：「第二次漢字簡化方案（草案）」の中の 116 字の採用を票決。

1981年　全国高等院校文字改革学会成立

1982年　雑誌『文字改革』復刊

1984年　語言文字応用研究所成立

文字改革委員会：文字改革工作座談会

1985年　国務院：「中国文字改革委員会」を「国家語言文字工作委員会」と改称。

1986年　全国語言文字工作会議

国務院：「第二次漢字簡化方案（草案）」廃案。

しかしこの年表からも判るように，現在のところ成功しているのは，異体字の整理、第一次簡体字の定着、漢語音方案の普及を見るのみである。表音文字はおろか，1977年に発表された第二次簡体字は，数ヶ月後には使用されなくなり，1986年１月に開かれた全国語言文字工作会議の後，正式に廃案となった。トルコでは共和国成立後五年で文字改革の実現を見た。ベトナムで表意文字から表音文字へ転換するのに要したのは二十年。ところが中国では，注音字母の制定からは七十年，新中国の成立からでも四十年を経た今日においてさえ，漢字という枠内での改良が成功しているに過ぎないのである。

このことは何を物語っているのであろうか。単に漢字は「読みにくい、書きにくい、覚えにくい（難認、難写、難記）」という表面的な不便さを指摘するだけでは説明のつかない何かがある。でなければ，多少の問題が

あったとはいえ，発表後に修訂委員会を組織し，人民代表大会常務委員会や全国政治協商会議において広く意見を求め，国務院より《増訂漢字簡化方案》として公布されようとしていた第二次簡体字が，全く以て廃案にされるようなことは，まずあり得ないと思われる。廃案になった簡体字の中には，委員全員が採用を可としていた111の文字[16]も含まれていたのである。本稿の目的は，この何かが何であるのか，その中国語の言語的特徴を探ることにある。

3・0　すでに見てきたように，文字体系は音声に影響される。それでは文字に影響を与えるのは，具体的に音声のどのような面を言うのであろうか。本項では，表音文字を使用している日本語と英語を中心に，その音声的特徴を基礎に，音節文字と単音文字の適合性を比較する。

音声の切れ目の最小単位は音節である。ことばを音節単位に区切って読むのは，誰にでも比較的容易にできる。文字が音声と結び付いた当初，表意表音を問わず，音節単位の文字を生み出したのは，自然の成り行きであった。そして一部の言語では，更に音節の構成要素である，単音を表す文字へと移行したが，それにはそれなりの理由がなくてはならない。単音文字は，確かに普遍性も高く，大多数の言語において使用されてはいる。しかし中国や日本では，一部の運動と希望と予測にも拘らず，ローマ字化は今後も実現しそうにないし，子音だけとはいえ，単音文字を借用した後に，母音表示部分を加えて，逆に音節文字を造った，エチオピア文字やインド系諸文字の例もあるからである。

これだけでも，単音文字が音節文字よりも進んでいるとか，優れた文字であるという見解や評価が，単音文字を使用しているヨーロッパ言語を基準にした，一面的な偏見であり得る可能性が予測されよう。文字が音声の反映である以上，音組織を無視した文字論からは，ある一つの観点に立った結論のみしか，導き出すことはできないのである。

ある言語とある言語の音声的特徴を，文字との関連で比較をする場合，その対象となるのは，音声の単位である単音と音節である。もっと具体的

に言うならば，音節を形成している単音の連続の仕方と，そこからくる音節の構造である。単音のみを比較した処で，それは例えば，ドイツ語にはウムラウトがあった方がよいとか，フランス語にはアクサンが必要であるとか，中国語にはｖ字は不要であるといった類の，平坦で断片的な比較に終ってしまう。この次元の文字改革は，実際上は表記法改革とも言うべきもので，アラビア文字を使用していた時のトルコ語においても，何度か実施されている。問題は個々の単音にあるのではない。何よりも先ず，単音連続の仕方と音節の内部構造，この二点の違いが，二つある表音文字 ― 音節文字と単音文字のどちらか一方を選択させている，直接間接の原因となっているのである。

以下，文字を選択する基礎的条件となっている，単音連続から考察を始めよう。

3・1　橋本萬太郎氏[17]によれば，言語の音組織には，それぞれの言語によって，継起的なものと，共起的なものとがあるという。かいつまんで言えば，継起的な音組織は，一つ一つの単音がはっきりと，比較的対等に発音されるのをいい，共起的とは，ある単音（子音）が，隣接する単音（母音）に，吸収同化される傾向の強いものをいう。文字と関連する部分の具体例を見よう。（数字は発音に要する時間比 ― 橋本氏による）

（日）　san ［saɴ］＜桟＞　　$\underset{5}{\hat{s}a}-\underset{5}{N}$

（英）　son ［sən］＜むすこ＞　　$\underset{2}{s}-\underset{6}{ə}-\underset{2}{n}$

ローマ字や音声字母では，どちらも同じく三要素で表記されるが，実際の音声上の違いは明白で，英語の“ｓ”がかなりはっきりと発音されるのに対し，日本語の頭子音“ｓ”は，子音の中でも比較的長く発音される摩擦音であるが，次の母音に重なっていて，短くてかつ弱い。中国語でも声母は軽く発音されるのが常で，福建語に至っては，声母が脱落することもある。継起連続の言語では，単音一つ一つが明瞭に発音されるのに比べ，

共起連続の言語では，ＣＶ連続がかなり密着している。

これはＶＣ連続にも言える。朝鮮語の韻尾子音を例にとると“p, t, k”は破裂を伴わない内破音（applosive）であるし，有声の“b, d, g”が現れないことも注意されてよい。また音節末に持続子音の摩擦音や破擦音が現れないのも，橋本氏[18]によれば，共起的な言語の特徴である。朝鮮語の韻尾子音は，英語のそれが摩擦や破裂を起すのと明瞭な対照を成しており，出わたりのある初声とは，自ずと性質を異にする。中国語の広東方言や福建方言に残る入声音，ベトナム語の韻尾子音など，いずれも同様である。継起連続の言語は，子音が強く明瞭に発音され，かつ子音連続が母音の前にも後にも普通に起るのに対し，共起連続の言語は，ＣＶ連続、ＶＣ連続を問わず，子音が非常に弱く短く発音され，子音連続もない。継起的および共起的という音組織の違いが，文字を規定する一次的要因と成っていることが理解できよう。

同じＣＶＣ構造でも，子音と母音の連続の仕方，特にＶＣ連続にこれだけの違いがあるとすれば，これらを全てＣＶＣ構造として同一範疇に分類するのは，適当ではないであろう。むしろ中国語や朝鮮語の中に，音節末子音が現れない日本語をも含めて，中国の伝統的な音韻学の概念である「声母＋韻母」構造とした方が，音声の実際に合っていると言える。

３・２　音節構造は普通ＣＶ構造と，ＣＶＣ構造に二分されており，中国語、ベトナム語、朝鮮語等はいずれもＣＶＣ言語に分類されている。この二分法が，文字との関連ではあまり意味がないのは，今見た通りであるが，ＣＶＣ構造との関連で，文字についての言及が二点あるので，ここで検討を加えておく。いずれも新田春夫氏の指摘[19]である。

１．音節末子音の交替による形態変化。

des　　dem　　den

２．アプラウト(Aplaut)

(独)	binden	band	gebunden
(英)	drink	drank	drunk

確かに橋本氏も言うように「単音の意識ができてくる」[20] のは蓋然性があろう。しかしこれだけで，直ちに単音文字に結び付けるのは，些か躊躇せざるを得ない。中国には古くから，音節を声母と韻母に分解する反切法があったし，日本でも，本居宣長によって確立され，原音図が十一世紀の平安朝にまで遡り得る五十音図は，子音と母音の概念なくしては不可能な，整然とした体系を示しているからである。当時すでに，縦の行は子音を同じくし（五音相通），横の行は母音を同じくする（同韻相通）ことを理解していた[21] のは重要である。それは形態変化ではないにしろ，縦の行は子音固定の母音交替であり，横の行は母音固定の子音交替であるからである。また子音固定の形態変化は，日本語の五段活用にも見られるし，ヨーロッパ語の形態変化は，二分法からすると，音節文字でも不合理とは言えないだけでなく，des, drinkなどの単音節語はもちろん，複音節語にあっても，意味を含有している音節ならば，形声文字（例えば“drink”という音声に，時制を表す部分を加えたもの）の適合性もまた高いかも知れない。英語は中国語以上に単音節語が多いし，形態変化あるが故に，文法的意味を表す音節もまた少なくないのである。

問題は，単音に分解できたか否かではなく，それが文字と結び付くか否かである。橋本氏[22] によれば，継起性の強い言語は，音節末にも自由に子音が現れるが，共起性の言語は，かなりの制約を受けるという。子音が自由に現れるというのは，持続音、有声破裂音を含めて，音節末子音が多いということ，母音の前後を問わず，子音が連続して現れる，この二点である。

3・3　以上見てきたように，継起連続の言語は，一音節内で語頭、音節末を問わず，子音連続がある。そして文字との関連，即ち文字への影響を考える場合，この子音連続があるのを無視しては，両者の関係を正しく捉えることはできない[23] 。具体例を英語に見よう。

（1）scab　scalp　skirt　sky　slang　sleep　smart　smoke
sneak　snow　speed　sport　stamp　stop・・・・

(2) mask mast lisp list・・・・

(3) books desks caps cups・・・・

既述のように，継起連続の言語では，子音がかなり明瞭に発音される。その子音が連続して現れるならば，子音は調音点，即ち発音器官二ヶ所一点によって決まるから，母音との組み合せによる連続時よりも一層明瞭に響く。子音間の境界は，他の単音間（母音＋母音，子音＋母音，母音＋子音）の境界よりも，はっきりしているからである。ましてや第二子音が破裂音の場合には，その子音を発する前に閉鎖があるために，そこに極く短い音声上のトギレが生じる。そして子音連続は，この破裂音が現れる場合が比較的に多いのである。

次に第三グループであるが，このグループの“s”は，複数という文法的形態素を表しており，ここからは，必然的に“s”の音を表す文字を抽出せざるを得ない[24] ことが判るであろう。このように音節構造を文字との関連で見た場合，音節末に子音があるか否かという観点から，CV構造とCVC構造に分けるよりも，子音連続の有無による分類の方が，より適切であることが理解できよう。

また子音連続は，音節の内部構造に多様性をもたらし，音節の長さにも影響を与えているが，これも重要な要因になっている。

V	a
CV	go me do
CCV	sky stay
CCCV	screw spray splay
VC	of as : it up
VCC	ask eagl
VCCC	Alps wolves
CVC	bell girl : cap book

CCVC	sleep　school : black　stop
CCCVC	straike　spring : split　strip
CVCC	desk　bild : books　caps
CVCCC	twelfth　desks : next　sixth
CCVCC	slept　cloths
CCVCCC	prompt
CCCVCC	script　scrimp　sprint
CCCVCCC	strenghth

音節の内部構造が，このように多様極まり，その長さにも一定性がない場合，音節を表示する文字は不適当であろう。「声母＋韻母」構造の言語は子音連続もなく，子音連続のある言語に比べ，音節の長さがほぼ一定している。例外は規則的で少ない。

3・4　日本語の音節は，子音と母音とを単純に一つずつ組み合せた構造で，子音連続はない。音節数が少ない原因はここにある。そして音節の長さも，ほぼ一定している。従って日本語の場合，音節文字で十分であるが，ここでは一歩を進めて，単音文字よりも音節文字の方が，より合理的であることを考えてみたい。

「声母＋韻母」構造を持つ言語は，一音節に現れる単音数が少ないだけでなく，母音、子音の絶対数そのものも，大体において少ない。そこで単音文字で表記する場合，勢い同一文字の出現率が高くなる。次に例文を挙げ，文全体で使用されている文字の総数と字形数の比率を比較してみる。

ながさきからきました。	10：9
Nagasaki kara kimasita.	20：9
そらはよくはれたが，かぜがつよい。	16：13
sora wa yoku hareta ga, kaze ga tuyoi.	31：15

いえにかえると，ふくもかえずに，またとびだした。　22：16
ie ni kaeru to, huku mo kaezu ni, mata tobidasita.　40：15

文字言語の識別手段は視覚による。従って，同形の字形が沢山あるよりも，数が少なく字形に違いがあるほど，識別は容易になる。上の数値からも判るように，使用されている文字の総数は，かながアルファベットの約半分と，断然少ない。しかも用いられている字形数の差は，ほぼ1対1と無きに等しい。文字の全体数はアルファベットが26字と，かなの半分であるから，文が長くなれば，当然これによる差はでてくる。しかし一度に視覚に入る文の長さには限度があるので，余り長い文の比較は意味がない。とすれば，ほぼ同数の異形字形を用いて，総数が少なくて済むかな文字の方が，同形の字形が繰り返して現れるローマ字より，識別機能は優れている，と言わねばならない。

3・5　それではこの点，英語ではどうであろうか。文中に用いられている文字の総数と字形数の比率は，どの言語においても文字の全体数が決っているので，似たような数値がでてくる。(括弧内は音節文字を用いた場合の比率)

This in·for·ma·tion is new to me.　24：12 (9：9)
He found him·self in an em·bar·rass·ing sit·u·a·tion.
39：16 (14：14)

例文で見る限り，使用されている文字の総数と字形数の差は，約2対1と大きい。文が長くなるほど，この差は広がるであろう。しかし音節文字を用いた場合は，その数も半分以下になり，字形数もローマ字より幾分少なくなる。その上同一音節（文字）はこの例文では出現していない。この点に関する限り，英語においても音節文字の方が有利である。

如何なる言語体系においても，文字の全体数が一番少なくて済むのは単音文字であるのは言を待たない。しかし実際に文中で使用される文字の数

は，一定の範囲内に限定さえすれば，総数、字形数ともに，音節文字の方が少なくて済むのもまた事実である。そして音節文字は，多い例として，ゲーズ語（古代エチオピア語）の267字を見ても，常用語彙よりもはるかに少なく，決して記憶に不便とは言えないのである。かつて Moorhouse 氏はこの過ちを犯した[25]。

しかし上述のように，音節の構成要素を見れば，日本語が単音数が少なく，かつ単純に「子音＋母音」構造であるのに対し，英語は単音も多く，かつ子音連続が母音の前にも後にも頻繁に出現する。そして単音の組み合せ方も多岐に亙っており，音節の長さも様々である。特に多音節語の場合，音節文字では，一語を表す幾つかの文字の音声の長さがまちまちになる。

A B　(o・blige)　　A B　(shrink・age)
[ə blaidʒ]　　[ʃriŋk idʒ]

A B C　(in・com・plete)　　A B C D　(prep・o・si・tion)
[in kəm pliːt]　　[prep ə zi ʃən]

同じ一音節であっても，このように内部構造が多様で，長さに開きのある言語では，一音節を一文字に移す時の基準がないので，音節文字では却って混乱を招く恐れがある[26]。幾つかの単音の組み合わせを一字で表す音節文字よりも，音声（単音）の流れに沿って発音を表記する単音文字の方が判り易いことは，自ずと明らかであろう。

また音節単位ではもちろん，単語レベルで見た場合でも，同一文字の出現率は極めて少なく，あっても一単語が数個の文字より成っており，日本語のように，子音字と母音字が一字ずつ単調に繰り返して現れるわけではないので，視覚による識別機能を低下させる要因とはなっていない。

grape
understand
international

単語単位による分かち書きも，単音文字の使用を容易なものにしているが，逆に言えば，単語単位による分かち書きの発生は，英語など単音文字を使用しているヨーロッパ言語においてこそ，自然の趨勢であったと見なすことができるのである。

3・6　以上見てきたように，視覚による字形識別（意味認識）機能からすれば，単音文字よりも音節文字が優れていることが，理解できるであろう。しかし音組織との関連で，単音文字の方がより適合性が高い言語があることもまた事実である。両者の違いは，音節構造の違いにあった。

ここで音組織と文字との適合性を整理しておくと，次のようになる。

1．共起連続の言語は，母音優勢で子音連続がなく，音節文字に適している。

2．継起連続の言語は，個々の単音が対等で子音連続があり，単音文字に適している。

4・0　さて，いよいよ残された文字 — 表意文字を考察する段になった。

文字は元来表意文字から出発していることはすでに述べた。そして借用により，当該言語の特徴に条件づけられて，表音文字へと移行したのも見た通りである。現在使用されている唯一の表意文字は漢字である[27]。漢字を使用しているのは中国語であり，漢字を生んだのも中国語である。漢字は，日本語や朝鮮語に借用されると，表音文字へと生れ変わった[28]が，王照の官話合成字母が大きな引き金となったにも拘らず，ついに逆刺激によって，中国において表音化することはなかった。

また近代科学、軍事力など，中国文明よりも進んだ西洋文明の刺激を受け，ローマ字化運動が勃興し，政府の方針、政策と民間の運動がうまく嚙み合いながら，大きな社会的な流れとなって展開されたのであるが，革命後四十年を経た今日でも，未だに文字の表音化は実現していない。それでは中国語の場合，音節構造以外に，どのような言語的条件が，文字の表音化を阻んでいるのであろうか。

既述のように，中国語は音組織が共起連続の言語で，その音節は，

1．「声母＋韻母」の構造を持つ。

2．子音連続がない。

3．音節の長さがほぼ一定している[29]。

などの特徴を有しており，この条件に合致するものとして，漢字もまた音節文字である。

残された問題は，日本語のように，なぜ表音音節文字ではないか，という点に絞られる。これを日本語との比較で考察してみたい。

4・1　文字改革反対派が根拠とするもので，言語的特徴と言えるものは，中国語を単音節語とする点である。そして文字改革推進論者が最も力を入れて反駁を加える[30]か，逆に逃げ腰になるのも，この単音節語擁護論である。つまり中国語は単音節語であるから同音異義語が多く，表音文字では判別し難いので，意味を表示している漢字が適当である，というのがその根拠である。双方ともに中国語を単音節語と見なしているので，先ずこの点を再検討することから始めたい。

4・2　試みに手元にある中国語の辞典を繙いて見るがよい。二音節語が増えている現代語の辞典はもちろん，古典語を主とした辞典である『辞海』や『辞源』（漢和辞典でもよい）でさえ，そこに収録されている語彙は，圧倒的に二音節語が多い。親字（単音節語）一字に対し，二文字語が幾何倍にも上ることは，どのページをめくって見ても一目瞭然であろう。最近行われた語彙調査の統計資料によって，音節数と語彙数の比率を見よう。先ず，使用度段階別による数値から。

使用度段階	単音節語	二音節語	三音節語	四音節語
1－　100	85	15	0	0
1－　500	332	166	2	0
1－1,000	565	431	3	1
1－2,000	957	1,020	18	5
1－3,000	1,309	1,653	32	6

表1　中国語常用語とその音節数（『現代漢語頻率詞典』付録 4 部分）

使用頻度の高い常用語ほど単音節語が多く，使用度が低くなれば，それだけ複音節語が増えている。この表では，1,000語から2,000語の間で，単音節語と複音節語が逆転している。

次に，語彙数三万余の，音節数の比率を挙げる。

音節数	語彙数	百分率	使用延数	百分率
単音節	3,751	12.0%	845,356	64.3%
二音節	22,941	73.6%	451,048	34.3%
三音節	2,374	7.6%	12,274	0.9%
四音節	2,010	6.4%	5,504	0.4%
五音節以上	83	0.2%	220	0.0%
総計	31,159	100.0%	1,314,404	100.0%

表2 中国語単語とその音節数（『現代漢語頻率詞典』付録 1 部分）

僅か12%の単音節語が，その使用率では64%にも上っている。ある文章中における単音節語と複音節語の比率はほぼ6対4と，単音節語の占める割合も，半分を多少上回っているに過ぎない。この数字が示しているのは，単音節の同じ単語の出現回数が多いという外の何物でもない。延数の多さとは，冷静にその実態を観察して見れば，意外にも個数の少なさを証明するだけのものであった。

この31,159語を構成している漢字は，4,574字であるが，その内単音節語のみを構成している漢字は，僅かの0.5%と217字に過ぎない。また逆に，単音節語と成り得ない漢字（区別詞）は，35.44%の1,621字[31]にも上る。音節構造が単純で，その数も多くなければ，単音節語などもとより無理な話である。音節数が411，単純に四声を掛けても1,644。これでは常用語彙数にも遙かに及ばない。むしろ単音節語は，複雑多様な音節構造を持つ英語にこそ多くても不思議はない。英語の辞典より，使用頻度数の比較的高

い単語約2,300を選んで[32]，その音節数を見よう。

	一音節語	二音節語	三音節語	四音節語	五音節語	合　計
語彙数	1,189	823	198	40	5	2,255
百分率	52.73%	36.50%	8.78%	1.77%	0.22%	100%

表3　英単語とその音節数

結果はご覧の通りである。意外に思った人も多いかも知れないが，頻度数の高い語彙にあっては，英語もまた単音節語が多い。否，2,000 語では，中国語の単音節語が半分にも満たないのに対し，英語のそれは，50%を越えている。僅かではあるが，英語の方が多いのである。意味を理解、認識し易くするために，音声にある一定の長さが必要であるとすれば，一音節が比較的長く，しかも単音の組み合せに多様性のある英語に単音節語が多いのも，自然の現象と言えよう。日本語や朝鮮語が複音節形態素の言語であるのも，音節の長さに関係していると思われる。

また英語の一音節語で，中国語が二音節語のものも，少なくない。のみならず，単語より一つ上の単位である連語すらある。

boy　少年　girl　少女　child　孩子
school　学校　park　公園　room　房間
we　我們　you　你們　they　他們
here　這里　there　那里　where　哪里
my　我　的　your　你　的，你們　的　his　他　的
her　她　的
one　一　个　two　兩　个　three　三　个
first　一　次，　第　一　个　twice　兩　次
best　最　好

日本語は複音節形態素であるが，それでも中国語の二音節語に対応する

単音節語が，僅かながらある。

め（目）　眼睛　　は（歯）　牙歯　　か（蚊）蚊子

次に文を比較して見よう。手元の英中辞典から例文をとる。数字は単音節語対二音節語の比率である。

We hope that the fine weath·er will hold.	7：1
我們　希望　好　天气　保持　下去。	1：5
Her eyes were cloud·ed with tears.	5：1
泪水　模糊　了　她　的　眼睛。	3：3
The work is well on.	5：0
工作　順利　進行。	0：3

英語には単音節語からのみ成る文も，珍しくはない。

She made good marks at school.
She will make him a good wife.
The town is an hour from here.

以上の例で明らかなように，中国語は単音節語である，とは決して言えない。のみならず，最近行われている「中国語は単音節語を基調としている」などのような慎重な言い回しも，事実に合っていないことがはっきりとしたであろう。

4・3　意味を表す最小の単位は形態素である。単語はこの形態素の組み合せより成る。単語「サムイ」は，内容を表す語彙的形態素「サム」と，形容詞という品詞を表す文法的形態素「イ」から成っている。また「ヤマ、カワ」は，それ以上分析した場合，意味を成さなくなるので，それぞれ単

語であると同時に，形態素でもある。

日本語には，「メ（目）、ハ（歯）、キ（木）、ヒ（火）」のような単音節形態素は極く少なく，複音節形態素が圧倒的に多い。それは「かお、はな、ゆび」など，最も基礎的な身体語彙にすら珍しくはない。朝鮮語、英語も複音節形態素の言語である。

朝鮮語	머리（頭）	소리（声）	이야기（話）	하나（一）	
英　語	ba·by	bod·y	fin·ger	ti·ger	ti·tle

逆に中国語は，辞典の見出し語が，一漢字（一形態素）であることからも判るように，単音節形態素が絶対多数を占めており，複音節形態素は，数量的のみならず，その分布範囲においても，次に挙げるいくつかのグループに，例外的に存在する程度である。

（イ）外来語　沙發（ソファー）　葡萄（ブドウ）
（ロ）擬声語　乒乓（ピンポン）　丁零（チリンチリン）
（ハ）虫の名　蟋蟀（コオロギ）　蚯蚓（ミミズ）

中国語は，一音節一形態素の言語と言えよう。一音節一形態素であるから，万に上る形態素（『現代漢語詞典』には9,274の親字を収める）を，僅か400余の音節で賄うのは不可能である。そこでアクセント（声調）による区別が行われる。それでも不十分(『現代漢語詞典』の声調を含めた音節数は1,165あり，一音節の形態素は平均7.96になる)であれば，次にとることのできる手段は，自ずと明らかであろう。

言語の最も基本的，かつ根本的な性質として，普通意味の違いは，音声形態によって表示されている。その音声形態が同形であれば，残された方法はただ一つ，文字形態にその違いを求めるしかない。つまり字形の違いは，意味の違いを表示するものとして，中国語には必然性の高いものであ

る。単音節形態素の言語は，字形に意味の違いを識別させる機能を持たせる条件を，本来的に具えていたと言うことができよう。

ベトナム語も単音節形態素であるため，借用した漢字に，更にベトナム語の発音部分を加えた文字，すなわち漢字より一層複雑な文字 — 字喃を造ったのであった。同じ漢字の影響の下に，単音節形態素と複音節形態素の違いにより，ベトナム語は形態素文字を造り，日本語は音節文字を造ったが，これと同様の現象は，西夏文字（単音節形態素語 — 形態素文字）と女真文字（複音節形態素語 — 音節文字）[33]の例にも見られる。

4・4 伝統的な解釈説明では，漢字は表意文字であるとされている。象形文字、指事文字、会意文字等はいずれもそうであり，さんずい「氵」は水を表し，きへん「木」は木を表している。それはその通りである。しかし意符は，漢字一字のある部分であり，象形文字、指事文字、会意文字は，数の上では極めて少ない。漢字の八割以上を占める形声文字 — 音声を表す部分の音符と，意味を表す部分の意符との組み合せより成る，この形声文字に視点を移せば，表意文字とは何かを，改めて考えておかなければならないであろう。

形声文字をその共通した字形により，二つのグループに分けて考える。

（イ） 放 故 政 攻
（ロ） 抱 泡 胞 飽

（イ）のグループは，意符の部分が共通字形で，ともに「攻撃、妨害を加える」の意を表す。これら四文字の意味の違いは，音符の部分で示されている。このグループの漢字は，発音に関係していない同形部分が同類概念を表し，音声を表している異形部分が，意味の違いを表している。

（ロ）のグループは，音符の部分が共通字形で，「中いっぱいに包む」の意を表す。そして包んでいる状態などを分類・限定しているのが意符の部分である。“抱”は親が子を抱くのをいい，“泡”は気泡をいい，“胞”

は児の生まるるをいい，“飽”は食して腹のいっぱいになるをいう[34]。このグループの漢字は，発音を表す同形部分が共通概念を表し，発音に関係のない異形部分が，意味の違いを表している。

このように形声文字は，組織的、体系的に意味の共通部分と相違部分とを，同時に一つの字形で表している。また転注文字は，意味上関連のある別の語に借用された漢字の謂であり，後に新たに形声字や会意文字を造った[35]。仮借文字は，意味に関係なく音声のみを借用した漢字であるが，これも後に形声字や「来 — 麦」の例に見るように，別の文字を造った。

即ち，漢字（象形文字、指事文字、会意文字を含む）は，その字形形成の原理や過程の如何を問わず，異なった音声形式は言うまでもなく，同じ音声形式であっても意味が異なる場合，その意味の違いを字形によって区別表示している文字，つまり字形全体が一つの形態素を表しているところから，形態素文字であると言うことができるのである。

4・5　“sky”を一つの文字単位としてみれば，この三つのアルファベット全体の字形を表意文字として見なすこともできよう。しかしこれらのアルファベットは，それぞれの単音に対応しており，他の音節の中においても同様に，それぞれ同じ音価の単音に対応している。従って，“sky”は一つの文字としてみるより，三つの文字の連続であると見なすべきである。

“飽”はどうであろうか。“食”も“包”も確かに一つの文字ではある。しかし“食”はshíという音であり，“包”はbāoという音で，この二つの文字を合体した“飽”はbǎoという音で，発音はそれぞれに異なっている。“包”が音を表していると言っても，それは声調を抜きにした素音節を表しているに過ぎない。従って“飽”は二つの文字の連続ではなく，一文字と見なすべきである。また“食”が音を表していないと言っても，“包”に字形“食”を加えることにより，声調に変化を来しているから，文字全体の表す音には関与しているのである。それは同時に，文字“包”、“食”が“飽”字の中では，それぞれ文字を構成する要素として，一ランク格下げになっていることにも関連している。この点からも，漢字は形態素文

字であると言えよう。意府といい，音符というのは，便宜的な呼称に過ぎない。

4・6 残ったのは，声調を含めての同音異文字である。

生 — 牲 — 声 — 升

“生”と“牲”は，声調を含めて同音(同音同調)であるから，これらは同じ形態素であると見なすこともできる。しかし“牛”は“生”の声調を第一声に止めておく働き，と言うよりもむしろ，素音節 sheng の声調を第一声にする働きがあるとの観点に立てば，異なる形態素を表示する標識 — 異形態素（異［形態素］ではなくて，異形態［素］）はゼロ，つまり異なった形態素でありながら，同形の形態素であると解釈できる。従って形態素が同形で意味の異なる場合，そこにはゼロ異形態素がある，と見なさなければならない。もちろん，生 — 牲 — 声 — 升はゼロ異形態素のために，形態素が同形となっているのである。

漢字は，その音声形態が同形であると否とに拘らず，形態素文字であると言うことができよう。中国語において，表意文字とは，形態素文字という意味に外ならない。

4・7 音声と意味と文字表記における同様の現象は英語にもある。先ず，音声形態が異なっていても同じ意味を表す時に，同じ文字を用いてそれを示す場合があり，文法的形態素にその例を見る。

books	girls
looks	follows
looked	bowed

また音声形態が同じで意味の異なる場合，文字で区別をする例もある。

[nou]	no	know	[flauə]	flower	flour
[bau]	bough	bow	[nait]	knight	night

日本語の例。

わたしのむすこはわんぱくで……
おしぼりでかおをふいておちゃをのむ
こうえんへえをかきにいこう

ハングル表記の例。

진심（真心）　〔tʃinʃim〕
진리（真理）　〔tʃinli〕 ⟶ 〔tʃilli〕

このように，字形による意味区別表示は，表音文字の世界でも利用されている，一種の意味認識を容易にする手段である。

後者の例における形態素（単語）は，文中同じ位置や文脈に現れることがない。その上常用語であれば，意味を取り違えることはない。従って書き分ける必要性などないわけであるが，このような簡単なことすら，相変わらず「改革」はなされていない。放っておいても差支えのない，取るに足らない問題である，と言ってしまえばそれまでであるが，逆の見方をすれば，このような簡単なことすら，手を加えることなく放置されたままになっているのは，そこにはそれなりの合理性が認められるからである，とも言えよう。

言語とは，一義的には音声言語であり，意味は音声に宿っている。文字言語は，音声の裏付けがなければ，その機能を果たすことはできない。両者の違いは，音声言語の認識は聴覚により，文字言語の認識は視覚によるところにある。文字言語の体系が，単純に音声を写し出すだけでなく，視覚による識別機能をより容易にするための手段を講じているのは，むしろ自然な現象であろう。アルファベットにしろ，かなにしろ，ハングルにしろ，表音文字といえども，音声をそのまま忠実に写しているのではないの

である。言語の機能は意味の表達にある。それは文字言語とて何ら変る所はない。とすれば，単純に音声を写し出すよりも，音声表出を約束事として条件づけながらも，意味の単位である形態素や単語を表す方に工夫がおかれてこそ，文字言語の視覚識別機能を，より生かすことになろう。文字言語の根本機能は，視覚識別作用による，意味認識にあるからである。

4・8　もし我々が，少しでも音声に忠実な文字体系を望むとすれば，O.Jespersen の Analphabetic Notation や K.L.Pike の Functional Analphabetic Symbolism のように，記憶にも実際の発音にも不便な，およそ実用には不向きな記号に行き着くことになろう。これは音声表記の記号ではあっても，意味表達を目的とした文字と見なすことはできない。文字は音声表記がより簡単で，視覚による意味認識が容易なものほど優れていることは，言を待たない。

我々が条件反射により反応を示すのは，聴覚、視覚を問わず，何かによって条件づけさえされていればよい。音声を聞けば即意味を理解し，文字を見れば音声が浮ぶ。と同時に，意味をも思い浮かべている。意味は本来音声に宿っている。しかしその意味が字形に条件づけされていれば，音声形態が同じである場合は，むしろ異なった字形の方が，選択肢がないだけに，また文脈による条件づけとの相乗作用により，正しい意味を読み取る反応は，より反射的になる。「は」の音に二通りあり，「へ」の音にも二通りある。にも拘らず，主語の後の「は」を「ha」と誤読したり，格助詞の後の「へ」を「he」と間違ってなど読まないことからも，容易に了解できるであろう。我々が文の意味を理解できるのは，環境（場面、文脈）による条件づけと，字形による条件づけの，両者が与かっているのである。後に見るように，中国語の常用文が，声調符号なしで判読できるのも，この環境の条件づけによるところが大きい。

4・9　しかしこれだけでは，中国語が形態素文字を生み出す条件を具えていたことを説明し得ても，中国語においての表音文字の不合理性を考察したことにはならない。およそ物事には，表の面と裏の面とがある。公

平な結論は，表裏両面から検討を加えて初めて得られよう。一面的な考察では，たとえ矛盾なく説明できたとしても，それは所詮限られた範囲内における論考に過ぎず，単に可能性を含んだ説明に止まる。形態素文字が，中国語にとってどの程度適合性が高いのか，他の文字種との比較の上に立った証明とは成り得ないのである。そのためには，中国語の特徴に照らしながら，表音音節文字と表意音節文字（形態素文字）を比較し，視覚による意味識別という観点に立って，中国語にとって，どちらがより合理的であるかを検討しなければ，最終的結論を導き出したことにはならない。

我々が文字言語を読む場合，その意味は普通形態素ではなく，単語や単語の組み合せである文節などの単位で理解する。それは如何なる言語でも，辞典の見出しが単語であること，書物の索引が単語やその組み合せの単位であること，文章を音読する場合，息の切れ目が単語以下の単位にはならないこと，などからも判るであろう。従って形態素を見る前に，文中において独立して運用される意味認識の基本的な単位 — 単語による視覚識別作用を検討することにしよう。

5・0　中国語の文字表音化にとって，最大の障害となっているのは，“同音字”である。表音化反対派は数多い“同音字”の存在を指摘し，推進派も“同音字”問題の解決をその前提と考えている。この“同音字”を巡る論争は，文字改革運動が起った当初から闘わされており，今に至るもその実体、実態が十分把握されていない。

“同音字”とは，文字通り「同音異文字」の意味と，「同音異語」の二通りの意味がある。従来この両者を必ずしも明確に区別していなかったために，議論の進展を見ることができなかった。その一つの例が，先程見た中国語単音節語 — 同音語多数論である。同音異字については後で見るとして，ここでは先ず，同音異語の問題に検討を加えることにするが，問題の所在を明確にするために，常用語から成る口語文と，非常用語も多く使用される書面語に分けて考察を進める。

文字改革委員会（1985年当時）の王均教授の話では，最近語彙調査が行

われ，それによると同音語（声調の違う単語を含む）は11.8%に上るとのことであった。そしてこの同音語は常用語に多く，常用語は使用頻度が高いので，これが表音化を困難にしているとの見解を示された。しかしその時筆者は，全く逆の考えを申し上げておいた。即ち，声調を含めない「同音語」は多くても，声調の違いは音声形態の違いとして“同音同調詞”に限定すれば，同音語はずっと少なくなること。常用語における同音語は，それほど問題にならないこと。この二点である。ここで詳しく筆者の考えを述べよう。

5・1　先ず常用語から成る口語文を，拼音で見てみよう。

Zhang Wen juede didi bi qiannian you gaole yi xie, shenti ye bi yiqian geng jiankang le. Zhang Wen wen didi jiali de qingkuang, didi gaosu ta, baba、mama shenti dou hen hao, dou qu dili laodong le. Meimei de xuexiao hai meiyou fangjia. Didi shuo, gangcai ta ye zai dili laodong, xianzai shi huijia lai na dongxi de.

この例でも判るように，判読は，声調符号がなくても，比較的容易である。常用語とは，文字通り我々が日常生活で常用する単語であるが，そればかりではない。きまり文句や常用表現も多い。そして何よりも，発話の背景となる言語環境が，我々が日頃繰り返して経験している，日常の場面なのである。話し相手が最後まで話す前に，話の先が判ることも，しばしば経験するところであるが，それは常用語を使用するような言語環境には，幼少時より条件づけされて来た，最大公約数的な場面が多いことが与かっていよう。声調符号がなくても判読できるのは，常用語とか，常用表現といった言語的要素の外，この環境によるところも小さくはない。

文法は言語表現を規定し，環境は言語内用を制限する。選択肢があるにせよ，それは限られた，特定の想像可能な範囲内での選択でしかない。日常の言語表現は，単語ばかりが常用なのではない。文や環境までもが常用の場合が普通であろう。話の内容が，予め予想できる原因もここにある。

従って同音異義語も，想像以上に困難なものではない。“一点”を例にとれば，前に“zhe”と“xiawu”を付けて“zhe yi dian”,“xiawu yi dian”とするだけで，その違いは明白になる。単語だけで表達するのは稀であるが，そのような場合は，言語環境ではっきりと特定化されているので，意味を取り違えることはない。

(1) A: Shenme shihou ?　何時？
　　B: Yi dian.　一時。
(2) A: Ta ne ?　彼は（何時に来るのか）？
　　B: Yi dian.　一時。
(3) Hai you yi dian, wo bu mingbai.
　　あと一点判らない所がある。

5・2　次に書面語であるが，しかしその前に，今一度同音語について趙元任氏の論拠を見ておくことにする。氏の見解は，かなり早い時期において，冷静に中国語の実際をおさえ，説得力に富んでいるが，文字改革論争史上,この論点を踏まえた議論が展開されていないからである。氏の考え[36]を要約しよう。

言葉の変化は常に，聞いてより判り易い方向へと赴いている。中国語の方言で，音節数が最も少ないのは北京語で420。四声を入れても1,380音節である。しかし北京語は，同音異字が多いために聞いて判らない，ということはない。聞いて判るようにするために，自然の摂理として，次の四つの方法が働いている。

1．一字語を少なくする。
　“好”を単語として用い，“善、佳、良”等は，他の字と組み合せて単語とすれば，同音語は大幅に減少する。
2．複音節語を用いる。
　“捉拿、桌子、愚拙”のようにすれば，表音文字で記しても，他の

語と混同することはないし，白話語彙は文語より豊富になる。

3．同音語の少ないものを取り，多いものを避ける。

“拿”は同音語がない。“持”は沢山あるので“拿”が優勢を占めるようになった。“好”は同音語がなく“佳”はあるので，“好”が用いられるようになった。

4．同音字のある字を同音字のない発音に改める。

“給”は“急、級、吉、及、極”等同音字が多いので，各方言ではすでに geei(gei) と発音されるようになり，同音字はなくなった。

また趙元任氏は，単音節語同音語（声調の違う単語は同音語とせず）の調査を行い，一音節平均約 1.3 語を弾き出している。そして，二文字、三文字から成る同音語は更に少なくなるから，中国語の同音語は，フランス語と大差ない，とまで言い切っている。このような数値は，調査の対象になる単語や単語数によって，多かれ少なかれ出入りがあるし，趙氏の調査の対象となった単語については，発表されていないので，これをそのまま論拠とすることは差し控えるが，筆者の考えは，氏の言うように，声調を含めた場合，同音語は大幅に減少することに加え，品詞が異れば言うに及ばず，文法的に同じ位置に現れる同音語であっても，両者の意味内容に類似性がなく，かけ離れていれば，たとえ書面語であっても，文脈上意味を取り違えたり，混同することはない，という点が一つ。それに同音語といっても，一組二単語が圧倒的に多く，多くてもせいぜい三単語で，四単語は稀である[37]ことを付け加えておく。同音語の多さで問題になるのは，組数の多さではなく，それぞれの組における同音語の数である。

shìchǎng［市場］①商品交易的場所　②商品行銷的区域
［試場］舉行考試的場所
［視場］透過光学儀器可以観察到的面積或立体角
shìgù　［事故］意外的損失或災禍
［世故］處世經驗

漢字は，辞典を調べなければ，発音が判らないという。しかし世界の如何なる言語をとってみても，発音が判っているからといって，即意味が判るとは限らないのも，また事実である。意味が判るというのは，予めその単語を知っていたからに外ならない。文字を見ただけで，発音ができるのと，意味まで理解できるのとは，自ずと別問題である。未知な意味の単語に同音語があった場合，辞典を調べる時に，最初に目に入るのが，求める単語であるとは限らない。しかし非常用語の場合，先程見たように，その語の表す意味は多くない。従って，意味を突き止めるためにかける労力は，非同音語にかけるそれと大差ない。しかも実際にそのような情況にぶつかるのは，そんなに多くはないであろう。このことは，我々自身すでに経験しており，確認できる筈である。日常頻繁に使用する用具を，例外的な例で以て根拠とするわけにはいかない。

このように見てくれば，口語文は言うに及ばず，書面語においても，同音語のみを取り挙げるとすれば，問題はさほど大きくはないのである。

同音異語を根拠とするのは，説得力に欠けると言わねばならない。

5・3　同音語が根本的な問題でないとすれば，外に何が考えられるであろうか。趙元任氏が見落している点である。音節構造にはもとより原因はない。意味表示部分を含んだ文字，と言うより字形全体が意味表示に拘っている文字から，純表音文字への脱却に困難があるとすれば，その原因は当然，意味を表す単位に求めなければならない。とすれば，やはり同音語と類似性の高い，意味の単位が要因となっている可能性が強い，と予測される。外に考えられるべき要素は見当たらないのである。

単語よりも小さい意味の単位は，形態素である。前にも見たように，中国語は各音節がみな意味を持っている，単音節形態素の言語である。そして単音節語と複音節語を比較した場合，106ページの表2からも明らかなように，12対88と複音節語の方が圧倒的に多い。複音節語の各音節は，それぞれ意味を有しており，かつこれらの形態素は，語頭にも語末にも現れるものが多い。朱徳熙氏のいう自由形態素（不定位語素[38]）である。そし

て自由形態素は，語彙的形態素に多く，かつそれらには同形の異義形態素が多い。表音化にとって，最大かつ根本的な障害が那辺にあるか，もはや想像に難くないであろう。以下実際の統計数字を基に，その実態を明らかにしようと思う。

例を jiāo に見る。

（イ）交班　交兵　交叉　交差　交錯　交代　‥‥
　　郊区　郊外　郊游
　　膠版　膠布　膠合　膠結　膠卷　膠木　‥‥
　　⋮

（ロ）邦交　成交　初交　締交　通交　跌交　‥‥
　　近郊　市郊　四郊
　　鰾膠　虫膠　阿膠　割膠　骨膠　硅膠　‥‥

（ハ）混交林　打交道　够交情　套交情　外交団　‥‥
　　黒膠綢　橡膠草　橡膠樹　紫膠虫

（ニ）班白　班輩　班駁　班車　班次　班底　‥‥
　　挿班　搭班　大班　倒班　道班　跟班　‥‥
　　兵変　兵操　兵差　兵船　兵丁　兵法　‥‥
　　標兵　歩兵　裁兵　撤兵　称兵　出兵　‥‥
　　⋮

次に jiāo の形態素と，その形態素から成る複音節の単語の数[39]を見る。

形態素	交	教	鮫	郊	膠	焦	蕉	礁	澆	茭	蛟
語　頭	65	2		3	17	20	2	1	5	3	1
語　中	3		1		5	4	3				
語　末	35			3	26	7	4	3			

形態素	姣	鴞	芅	峧	椒	轇	嬌	驕	蟭	僬	鷦
語　頭		1			1	1	16	7	1	1	1
語　中								1			
語　末			1		7		1	2			

表４　jiāo の同音形態素とその自由形態素

ここに挙げた漢字の中には，日常耳にしたり，目にしたりしないものも多く含まれていることに注意されたい。古典が豊富であるということは，それだけ書面語が発達していることでもある。そして書面語は，単に単語だけではなく，文体にも拘っていることを忘れてはなるまい。

５・４　さて次に，漢字の造語力を調査した統計数値を基に，本論に関連する数値を算出したので，それを挙げておく。根拠とした資料は『現代漢語頻率詞典』（北京語言学院出版社 1986 ）に収録されている，表八の「漢字構詞能力分析」である。

漢　字　数　　4,574 字

語　彙　数　　31,159 語　　一字平均 6.81 語を構成

複音節語数　　27,408 語　　一字平均 5.99 語を構成

語頭漢字数 3,600　構成単語数 27,402　1 字平均 7.61 語

語間漢字数 1,800　構成単語数 6,776　1 字平均 3.72 語

語末漢字数 3,405　構成単語数 27,377　1 字平均 8.04 語

自由形態素数

語頭と語末に現れる漢字 2,701字　59.05％

語頭と語間に現れる漢字 1,666字　36.42％

語間と語末に現れる漢字 1,647字　36.01％

語頭、語間、語末のいずれにも現れる漢字 1,543字　33.73％

自由形態素合計数　　2,928字　64.01％

これを整理すると次のようになる。

1．　中国語には，同音異義形態素が多い。

2．　これらの形態素は，語構成の能力が強く，いずれも多数の単語を形成している。

3．　そしてその六割以上が，語頭、語間、語末のどの位置にも自由に現れる自由形態素である。

視覚による識別作用は，同形字が沢山あるよりも，異形字が多く同形字はより少なく現れる方が優れている。同音の下に，全てを同形で表すよりも，意味の違いにより，字形もそれ相応に異なったものにすれば，視覚による識別はより容易になろう。中国語において，同音異義形態素の占める比率は，同音異義語の比ではない。しかもその同音異義形態素が，多音節語のどの位置にも現れるのである。中国語が単音節語であると錯覚される主な原因はここにあった。

5・5　さてここで言語の基本に立ち返って考えてみよう。言語の重要な機能に意味の表達がある。この機能をより効果的に運用するために，音声言語、文字言語ともにそれなりの手段を講じている。前者にはポーズの取り方、強弱、抑揚等があり，後者は，分かち書きや句読点などの各種記号にそれを求める。対聴覚、視覚の違いはあるにせよ，いずれもあるまとまった意味の単位による区切りであることに違いはない。言語が意味表達の用具である以上，意味をより正確に判り易く表達するために，表現上の工夫がとられるのは当然である。音声言語は直接音声に訴えることができるが，それが間接的手段となる文字言語の場合，単に音声との約束事としての記号に止まらず，視覚作用に訴えられる可能な限りの手段が講じられるのは，言語が我々人類の知的産物であってみれば，自ずと経験より生み出される，知的工夫の結果と言えよう。

文字言語の根本機能は，視覚による意味の識別・認識作用にある。中国語のように同音の異義形態素が多い言語では，同形の字形を用いるより，形態素に対応した字形を用いる方が，その機能をより効果的に発揮できるのは，説明するまでもなかろう。

音声言語と文字言語の根本的な相違点は，音声言語には，具体的な言語環境があるが，書面語のそれは，間接的になって，抽象的な内容が多くなり，抽象度自体も高くなることである。従って当然その分，我々が共通に持っている具体的な言語環境は少なくなる。このような書面語にあって，多くの異義形態素を持つ音節が沢山現れるとすれば如何であろう。同音異議語を含まない文章であっても，同音異義形態素の音節は枚挙に遑がない。具体的な数値を新聞記事に見よう。

全国人大常委会在過去一年里対政府工作和法律実施方面監督不力，有負衆望，不能令人満意。（以下略）

	同音異義形態素数	
全 quán	17	拳、権、佺、詮、荃、輇、泉、痊、銓、惓、筌、蜷醛、鬈、鯨、顴
国 guó	8	摑、溷、幗、膕、馘、虢、瀫
人 rén	4	仁、壬、任
大 dà	2	汏
常 cháng	11	長、嘗、萇、倘、徜、場、腸、裳、嫦、償
委 wěi	27	偽、蔿、偉、葦、緯、煒、瑋、韙、尾、洧、諉、娓萎、唯、猥、隗、痿、骪、鮪、壹、暐、韓、痏、瘣頠、艉
会 huì	32	滙、彗、慧、噫、薏、檜、恚、卉、惠、潓、憓、蕙蟪、傯、賄、殯、繢、噦、穢、繪、浍、烩、荟、桧絵、誨、晦、諱、喙、闠、醘
在 zài	4	再、載、儎
過 guò	1	
去 qù	4	趣、覷、闃

（以下略）

次に，この十個の形態素の内の，自由形態素の数を調べる[40]。

形態素	全	国	人	大	常	委	会	在	過	去
語　頭	34	71	87	298	23	15	41	27	83	11
語　間	4	6	18	18		1	2	4		
語　末	16	51	239	42	22	6	90	15	19	13

表5　十個の形態素とその自由形態素

以上の調査で明らかになったように，使用頻度の高い4,574の形態素、任意の音節jiāoの形態素、実際に使用されている文章の中での十個の形態素は，いずれも平均値、具体値ともに，同音異義形態素と自由形態素の多さ，およびそれら形態素の造語力の強さを示している。中国語の文字表音化にとって，最大かつ根本的な障害と成っているのは，この三点にあった。同音語も，このような語彙全般に亙る構成状況が背景にあるからこそ，表音化障害の一因と成り得るのであって，同音語自体は，あくまでもプラスアルファの要因に過ぎない。

このことは漢字の使用を有利なものにしている。視覚による字形識別 ⟶ 意味認識を容易にすることはもちろん，初めて出会う複音節語であっても，その一つ一つの漢字（形態素）を知っていれば，単語の意味が判ることがある。『漢語新語詞詞典』（山東教育出版社 1988 ）を手にしながら，“恐資病”を目にして思わず微笑んだのは私一人であろうか。そしてこのような単語は言うに及ばず，初めて出会う単語であっても，意味が判る判らないとは関係なく発音ができることは，この辞典や『現代漢語難詞詞典』（延辺教育出版社 1985 ）を開いて見れば，意外に多いことが判然とするのである。また音声だけを聞いて判らない時に，漢字を尋いてその意味が判明した経験は，私達が営んでいる言語生活において，誰でも多かれ少なかれ持っていよう。それはある字形（漢字）が音声だけでなく，意味の裏付けを伴って記憶されているからである。中国語にとって，形態素文字は，文脈と同じ位に重要な役割を担っていると言っても，決して過言ではない。

常用語からなる易しい口語文，具体的な言語環境を持つ，日常の身の回りのことを表現する口語文では，表音文字の使用は可能であり，一定期間経過すれば，慣れるに従って混乱もなくなるのは間違いない。しかし漢字を全廃し，全面的に表音文字に移行代替するのは，日常生活の用具としての中国語の使用に，却って困難をもたらすだけである。それは漢字が表音文字に比べて覚え難い以上の困難になるであろう。そして古典を学ぶ時に初めて漢字を学習するとすれば，漢字の習得は，たとえ数量的、範囲的に制限されたとしても，否，そのような制限があるからこそ，今より数段難しいものに成らざるを得ない。この点に関して，韓国における漢字教育[41]も，もう少し考慮がされて良いと思う。

5・6　さて漢字を存続させるということになれば，口語文の表音文字化問題は，それを前提として，ここでもう一度考え直して見なければならない。即ち，表音文字が極く狭い範囲でのみその有効性を発揮するとすれば，小学校の高学年からは漢字を必要とするであろうし，中学からはその量も急増しよう。二種類の文字の学習が，二重の手間となるのは好いとして，やがて全面的に漢字に移行するとすれば，表音文字の習得は，漢字学習との関連がない限り，一時しのぎの方便に過ぎなくなり，無意味なものに成り終ってしまう。表音化に問題がないというのは，漢字が不合理であることには決してならない。それどころか，視覚による字形識別機能より見れば，漢字は，すでに明らかなように，口語文においても，表音文字以上の合理性を持っているばかりでなく，より重要な問題は，漢字の学習を遅く始めれば，それだけ漢字の習得にとって，却って不利な影響が生じることである。

自由形態素が多いという単語の構成状況，およびそれら形態素には多くの同音異義形態素があるという形態素の分布状況に照らしてみれば，漢字の学習が早ければ，それだけ語彙習得の効果も上る。常用字の画数が少ないことも考えれば，小学校の低学年から漢字だけの文（補助手段として，表音字母を使用するのは別として）を学ばせるのに，それほど

障害があるとは思えない。漢字が覚え難いとは，表音文字との比較による相対的評価でしかない。もちろん文字言語は，書き手にとっての簡便性と，読み手にとっての識別度の両面が要求される。しかし言語の機能と使用目的が意味の表達にあるという点と，書き手一人に読み手多数という普遍的状況からすれば，最も重視しなければならないのが，読み手の論理であることに異論はないであろう。表音文字に比べて覚え難い面があるとしても，それは音声との関連において言い得ることであって，意味範疇を基にした字形は，中国語のような同音異義形態素と自由形態素の多い言語にとっては，意味とのセットによる記憶に，却って便利な面をもたらしていることを見逃してはならない。その効力は，単語単位の記憶に，一層発揮されている。であるから，漢字にとって残された問題は，漢字の音声を学ぶに当って，より鮮明な音声としての印象を受けさせることにある。

このように見てくれば，漢字は表音字母を補助手段として，低学年から学び始めた方が，その効果も大きいことが理解できよう。現在一部の実験小学校で進められている，全文に拼音を施した「実験課本」による教育効果[42]に注目したい。

6・0　言語が意味表達の用具であり，その意味が音声に宿っているとすれば，それを文字に写す場合，意味あるいは音声の単位に対応するのが自然であるから，可能性としては，文字には次の四種が考えられる。

1．単語文字

2．形態素文字

3．音節文字

4．単音文字

これは文字使用の歴史的事実にも，現在使用されている実際状況にも合致している。「1」と「2」は意味の単位に対応し，「3」と「4」は音声の単位に対応している。これら四種の文字は，それぞれに長所と短所を持ち，それら長所と短所は，表裏一体を成している。即ち，番号が若くなるほど文字の全体数は多くなり，字形も複雑、繁雑になる。しかし実際に

使用し文章を書く上では，使用する文字の総数や出現する同形の文字数は少なくて済む。逆に，番号が大きくなるほど全体数は少なくなるし，字形も簡単になるが，使用する場合の総数は多くなって，表記は冗長になる。それはどの言語でも単語や音節等の数を調べれば判るように，番号が一つ違えば，増減は少なくとも倍半分にはなる。ただ単語一つに限定して見れば，総じて表音文字の方が表意文字よりも画数（ローマ字数と漢字の画数の比較）が少なくて済む点が，優れていると言えよう。しかし一単語の占める面積は漢字の方が小さいし，英語には十字以上の単語も少なくないので，それらを横に並べれば，かなり冗長になるという欠点がある。

book　（2）	書（1）
dictionary　（5）	詞典（2）
monofilamento　（6）	単絲（2）
notwithstanding　（8）	尽管（2）

（数字は文字の占める横の長さを示す。ローマ字2字を漢字1字分とした。）

これに対し，陳明遠氏[43]の指摘するところによれば，漢字の明晰性は，横線や縦線など平行する線の多少に拘る問題であり，画数の多少には関係ないという。

（イ）囊（22画）	鼻（14画）	彙（13画）	書（10画）
（ロ）顫（22画）	騾（21画）	鰻（22画）	鯉（18画）

単語文字は字形の複雑さから，ほとんど自然淘汰に罹って少なくなっている。しかし日本語のような複音節形態素の言語には有用で，「掌、鶏、机、卵、頂」など，今でも比較的多く使用されており，常用漢字1,945字の内約30％に当る600字近くが単語文字として[44]も用いられている。訓読

のない朝鮮語においても，個人のメモやノートには，漢字を訓読の形で使っている若者がいる[45]という。単語文字の便利さが窺える例である。韓国に漢字運動が根強く残っているのは，言語的特徴による理由なしとしない。

文字言語の根本機能は，視覚による意味識別作用にあるから，文字は自然の趨勢として，それぞれの言語にとって識別し易い形式を選ぶ。ある言語にとって，どの形式が識別が容易であるかは，その言語の音節構造および形態素の音節数との関連で決まったのであった。従ってこれらの文字間には，決して一概に優劣の評価を下すことはできない[46]のである。

6・1　以上見てきた，音節構造、形態素、文字の三者の関係を整理して，一覧表に示すと次のようになる。

<table>
<tr><th>言語例</th><th>文字名</th><th>音節構造</th><th>形態素</th><th>文字種類</th></tr>
<tr><td>英語</td><td>アルファベット</td><td>複子音音節</td><td rowspan="2">複音節形態素</td><td>単音文字</td></tr>
<tr><td>朝鮮語</td><td>ハングル</td><td rowspan="4">単子音音節</td><td rowspan="2">表音音節文字</td></tr>
<tr><td>日本語</td><td>かな</td></tr>
<tr><td>中国語</td><td>漢字</td><td rowspan="2">単音節形態素</td><td rowspan="2">表意音節文字
（形態素文字）</td></tr>
<tr><td>安南語</td><td>字喃</td></tr>
</table>

表6　音声と文字種の比較

この表から次のことが言える。

1．子音連続のある言語は，単音文字に適している。

2．子音連続のない言語は，音節文字に適している。

3．複音節形態素の言語は，表音文字に適している。

4．単音節形態素の言語は，表意文字に適している。

中国語は「2」と「4」の条件に規定されて，形態素文字を生んだ。言語は一義的には音声言語であり，表意文字といえども，その根底には音声がある。意味を表す文字にも，音声表示部分があった方が，字形上の繁雑さは減少し，それだけ合理性を増す。中国語において，意味表示部分と音

声表示部分の組み合せからなる形声文字が大勢を占めるに至った所以である。

6・2　中国語は決して，形声文字を発明したがゆえに表音化に進まなかった[47]のでもなければ，都市国家時代が短かったために表音化が間に合わなかった[48]のでもない。全面的に表音化に移行するには，その前提として，上の第二点と第四点が変る以外に難しい。そして中国語史に照らして見れば，この二点こそ最も変化の起こり難い点[49]なのである。軽声化が進めば，儿化音や“我們”のようにＣＶＣ構造の音節が生れる可能性はある。しかしこれは単音文字化の条件ではなかった。ましてや語彙的形態素が，軽声化 ⟶ 韻母の脱落にでもなれば，逆に表音化の障害には成っても，決してその要因とは成り得ないであろう。また中国を取り巻く国際環境も，表音文字運動を促す要素は見当たらないし，ワープロの発明、改良、普及により，漢字が機械化に十分対応できることも証明されている。

ベトナムがローマ字を採用するようになったのは，字喃が余りにも繁雑に過ぎたうえに，植民地化の過程において，統治者側のフランス人，反抗勢力側のベトナム人の双方が，共にその目的を達成せんがために，既成のクオック・グーを利用し普及させたからである。しかしローマ字だけでは不十分で，多くの補助記号を用いなければならないという欠点がある。

韓国における漢字の使用率が，日本に比べ格段に低いのは，次の理由による。

1．音節末尾に終音がある。そのために中国語の一音節は，朝鮮語でも一音節となり，漢字一字がハングル一字で表記される。

2．訓読方式を生み出さなかった。

3．簡体字を造らなかった。文教部は1967年11月に544の略字案を発表したが，翌年の3月には廃案を決定[50]した。これは漢字廃止を目的とした措置である。

もちろん文字は，言語的特徴にだけ制約を受けるのではない。冒頭のトルコ語の例や，上述のベトナムにも見るように，宗教的、政治的もしくは

文化的条件に左右される場合も決して少なくない。しかしこれは本稿の対象外である。

6・3 今後中国における文字改革の方向は，形声文字の構成原理を基に，漢字を如何に簡明かつ体系的に再構成するかという点と，それに歴史的系統性をどのように加味するかという点，この両者の接点を求めながら進むことになろう。現在使用されている漢字を，ただ単に共時的視点でのみ単純化するのは比較的容易である。400 余の音節に対応する記号に，声調を表す部分を加え，極力画数を少なくした意味範疇を示す記号を組み合せればよいからである。陳明遠氏[51] によれば，単体字は 258 字，二つの部分から成る合体字は 1,857 字に上るという。しかし古典語彙との関連性が，強くて多い中国語にあっては，共時的に表記上の簡明性を求めるだけでなく，通時的にも古典との関連を考慮に入れた研究がなされるべきである。それが形態素文字である漢字の長所を生かすことになるからである。以上の理由で，中国で提唱されている“約定俗成”の方針には，筆者は即同意することはできない。共時的簡明性と通時的系統性をどのように嚙み合せるかは，専門的な研究を要するからである。両者の適度の兼合い，それが漢字の歴史と中国語の実際に，最も適った方法であり，最も合理的な文字体系なのである。漢字簡体化の研究作業は今でも続行中と聞く。次の公布を待つことにしよう。

付記　1．本研究には，国際文化経済研究所から，1985 年度研究旅費の支給を受けている。中国文字改革委員会（後，国家語言文字工作委員会と改称）の王均教授、費錦昌先生には，全国語言文字工作会議直前というお忙しい中を，また復旦大学の許宝華教授には，せっかくの日曜日に，それぞれ貴重なお時間を割いて戴き，面倒な質問に一つ一つ丁寧に答えて戴いた。ここに感謝申し上げたい。当時はまだ私の考えは漠然としたものであったが，次の二点だけは申し上げておいた。

1．同音語は表音化の障害とはならないこと。

2．漢字は“語素文字”（形態素文字）であること。

2．本稿における読点は，試みとして，従来の「、」には「，」を，並列関係の所には「、」を用いた。中国語からの借用である。その効用については，例えば90ページ27行目や92ページ３行目などから，各位の判断を仰ぎたい。

注

（1）柴田武「トルコの言語改革」『文字と言葉』刀江書院　昭和26年

（2）ホシノ　ユキノリ「トルコ　ノ　國字改良　視察　概要」『カナノヒ　カリ』122号　昭和 7.2

（3）西田龍雄「世界の文字」　西田龍雄編『講座言語・第５巻　世界の文字』大修館書店 1981 p.22

（4）陳明遠 1981 「漢字簡化芻議」『複印報刊資料・語言文字学』1982.1　これは繁体字 544 字と，簡体字 515 字の平均値である。「常用漢字字形表」（蘇培成、費錦昌『文字工作者実用語文手冊』中国国際广播出版社　1988）に収める 1,364 字の平均画数は9.65 画である。

（5）日本語のヤ行やワ行のように重複する部分があるので，実際には136音節。

（6）清・朱駿聲『説文通訓定聲』中華書局　1984　p.18～p.24

（7）周有光『漢字改革概論』（修訂本）文字改革出版社 1961 p.7

（8）志賀直哉　昭和21年「國語問題」『志賀直哉全集』第七巻　岩波書店　昭和49年　所収

（9）黄公度『日本雑事詩』藝文印書舘　民國63年版　p.37

（10）黎錦熙『國語運動史綱』商務印書館　民國24年再版　p.34～35

（11）倪海曙『清末漢語拼音運動編年史』上海人民出版社 1959　p.9～p.12

（12）叶籟士「關於文字改革的几个問題」『語文現代化』5　1981　p.59～60

（13）錢玄同 1918 「中國今後之文字問題」『新青年』第四巻四號　汲古書院　影印本 1970

（14）馬叙倫「在中國文字改革研究會成立會開會辭」『中國語文』創刊號 1952

（15）この年表は『中國語文』、『拼音』、『文字改革』、『語文現代化』および『新時期文字改革的方針任務』（文字改革出版社 1985）により作成した。文字改革運動の支柱には，共通語普及もあるが，ここでは文字に関する事項のみとした。

（16）復旦大学許宝華教授談（1985.12）。許教授によれば，簡体字一字一字について投票を行ない，一人でも反対者がいれば再考に回されたという。同時に教授は，間もなく開催される全国語言文字工作会議では，簡体字を減らして公布するか，または全

部廃案になる可能性もあるとの個人的見解を示された。

(17) 橋本萬太郎「音韻体系の比較」『日英語比較講座』第1巻　音声と形態　大修館書店　四版 1980　p. 90

(18) 橋本萬太郎　同上論文　p. 93～94

(19) 橋本萬太郎編『世界の中の日本の文字』弘文堂　昭和55年　p. 50

(20) 橋本萬太郎編　同上書　p. 51

(21) 山田孝雄著『五十音圖の歴史』宝文館出版　昭和55年復刻版　p. 32～48

(22) 橋本萬太郎　上掲論文　p. 93～99

(23) 単音文字との関連で，子音連続を指摘したものに，唐蘭「中國文字改革的理論和方案」があるが，これには批判を見るのみである。論文未見のためここで取り挙げるのは差し控えるが，曹伯韓氏の論文「半拼音呢，還是全拼音呢？」（『中國語文』創刊號1952)に当該箇所と思われる所が引用されているので，その部分を掲載しておこう。

> 中國語言，以單音節語作基礎，由於没有複輔音，一個字構成的音素，最多也只包含了輔音、介音、主要元音和韻尾輔音四個音素，語言的單位不多，所以有很多同音字。（後略）

なお，この論文は自家出版のため，現在では入手できない旨，国家語言文字工作委員会の費錦昌氏よりお手紙を戴き，同時に種々ご教示を戴いた。ここに記してお礼にかえたい。

(24) 歴史的には，アルファベットの起源は，子音文字体系がギリシャ語に借用されてから，母音字を造ることによって生れた。

(25) A. C. Moorhouse, Writing and the Alphabet, London Cobbett Press 1946 邦訳書『文字の歴史』 岩波書店　p. 28～29

(26) 日本語における漢字が複音節であるのは，日本語の形態素が圧倒的に複音節であり，かつ音節の長さも一定しているところに，漢字が表意文字であるので，部分的に用いた場合，有効に作用するからである。

(27) 漢字の外に，中国雲南省のモソ族が使用しているモソ文字があるが，これは絵画性の強い原初的な文字であるので考察の対象からはずした。

(28) ハングルはアルファベットの影響を受けており，かなのように漢字を変形させたものではないが，一音節一字、一マス一字といった漢字の発想が取り入れられている。

(29) 母音は，介音になる時はもちろん，主母音であっても，複母音の中に現れる時には，単母音時より短く発音され，音節全体としては同じ長さになる。単独では長く発音される三声も，実際には半三声となり，他の音節とほぼ同じ長さになる。軽声は，固定形態素（注 38 参照）や，常用語の第二音節等規則的である。

(30) 正面からの反論は，趙元任氏がその代表であろう。注（36）参照。同音語の問題は，避けて通る者が多い。

(31) 「漢字構詞能力分析」（『現代漢語頻率詞典』北京語言学院出版社 1986）より算出。

(32)　『エッセンシャル英和辞典』（旺文社　昭和44年版）による。　編者が最重要語として「＊」印三つを付けた約2,300のものより，単語（固有名詞は含まない）のみを選んだ。頻度順ではないので，中国語の場合と全く同列に論じることはできないが，頻度の高いものであることに違いはない。

(33)　西田龍雄「東アジアの文字」西田龍雄編　上掲書 p.229～231

(34)　（イ）のグループの解釈は，藤堂明保『漢字語源辞典』（學燈社　昭和40年　二版）を基に，（ロ）のグループは，白川静『字統』（平凡社 1984）を基にした。

(35)　河野六郎 1977 「轉注考」『河野六郎著作集』3　平凡社 1980　p.141～144

(36)　趙元任「反對羅馬字的十大問題」『文字歴史觀與革命論』北平文化学社　民国20年　所収

(37)　「常用同音詞表」（蘇培成、費錦昌『文字工作者実用語文手冊』中国国際广播出版社 1988 ）には，419組876語を収めるが，その内3単語は29組，4単語に至っては僅かの4組に過ぎない。因みに4単語4組を挙げておこう。

（イ）gōngshì 公式　公事　攻勢　＊宮室

（ロ）jījiàn　＊擊剣　＊機件　＊肌腱　基建

（ハ）qǐshì　啓示　＊啓事　＊起事　起誓

（ニ）yìyì　＊異義　奕奕　意義　＊意譯

＊ 印は頻度数の高い8,000語（『現代漢語頻率詞典』）には収録されていない単語であることを示す。

(38)　朱德熙『語法講義』商務印書館　1982　p. 9～10　朱氏は単独で単語となる形態素を“自由語素”と呼んでいるので，これを「独立形態素」と訳し，“不定位語素”を「自由形態素」，“定位語素”を「固定形態素」と訳すことにする。

(39)　この数値は『現代漢語詞典』商務印書館 1983 第二版、『新しい排列方式による現代中国語辞典』日外アソシエーツ株式会社 1982 、『現代漢語逆序詞目』四川人民出版社 1984 、『簡明漢語逆序詞目』知識出版社 1986 により算出した。

(40)　注(39)に同じ。

(41)　森田芳夫『韓国における国語・国史教育』(1987 原書房）によれば，1970年大学、高校の古典の一部および漢文以外の教科書から漢字が除去されたが，1974年より中学、高校の教科書に，ハングルと併記される形で約1,800字が復活した。1985年韓国国語教育研究会は，「漢字教育は国民学校一学年より実施すべきである」と主張している。(p.201～203)

(42)　普通の教科書は，易しい文章で新出単語のみ拼音をふり，「実験課本」は，やや難しい文章で文全体に音を付けている。黒竜江省で実施された中学入学統一試験の結果，実験クラスの生徒は，中国語の全ての問題において，普通クラスの生徒を上回ったという。（劉導生「新時期的語言文字工作」『新時期的語言文字工作』 ― 全国語言文字工作会議文件彙編　語文出版 1986 p.20)

(43)　陳明遠　上掲論文。

(44)　日本語では，これらの単語は，ほとんど形態素でもある。

(45) 梅田博之「韓国における最近の言語問題」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『通信』第5号 1968.9 注4)

(46) 近年では「情報貯蔵」という視点から，それぞれの文字に同等の価値を与えるようになって来ている（例えば Albertine Gaur, A History of Writing. London 1984(The British Library), New York 1985(Charles Scribner's Sons) 邦訳書『文字の歴史』原書房 序文）が，本稿は従来の「言語を再現する手段」からしても優劣評価が不可なることを論じたものである。

(47) 河野六郎「文字の本質」『岩波講座日本語 8 文字』岩波書店 1987 p.12

(48) 宮崎市定「中国古代史概論」『宮崎市定アジア史論考』上巻 朝日新聞社 昭和51年 所収 p.146～149 或いは簡体化が進んだ可能性はあるかも知れない。

(49) 次の三つのケースを見れば，明らかであろう。

1．上古漢語に存在していた二重声母の消失。

2．二音節二語が，一音節一語となる。

之乎──→諸

不用──→甭

3．複音節一字語を音節数に合せた字数で表記。

圖──→圖書館

浬──→海里

(50) 森田芳夫 上掲書 p.203～204

(51) 陳明遠 上掲論文。